

隨泉寺寺報

平成 23 年 (2011 年) 5 月号 第 489 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

宗祖降誕会法要

講師 住職 自修

講題 『いのちめぐまれて』

東日本大震災 被災者の皆様へ お見舞い申し上げます。

ご門主様お言葉

このたびの東日本大震災によって被災された皆様に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。また、この災害によっていのちを失われた方々にご遺族に哀悼の意を表します。大震災という思いがけない事態に直し、深い悲しみの中にあります。宗門では、すべての被災された方々の悲しみに寄り添い思いを分かち合いたいとの願いを持って、4月9日より親鸞聖人750回大遠忌法要をお勤めいたします。阿弥陀如来のお慈悲のなかに、ともに支え合う宗門であることを心にとめていただき、心身ともにお大切にお過ごしになられますよう念じます。



2011 (平成23) 年4月 門主 大谷 光真

5月の法座予定

- 5月 8日 …… 掃除 長者原東
- 5月 12日～14日まで …… 京都本願寺親鸞聖人750回大遠忌参拝旅行
- 5月 16日朝席10時より …… 初参式・宗祖降誕会法要
- 5月 16日朝席終了後 …… 門信徒会総会 おとき
- 5月 16日昼席午後1時より …… 宗祖降誕会法要
- 6月 2日午後6時より …… 門信徒会本部役員会

「東北地方太平洋沖地震」並びに

「親鸞聖人750回大遠忌法要」に関する総長談話

去る3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震の災害によって被災された皆様に心よりお見舞い申しあげます。また、この未曾有の災害によっていのちを失われた皆様、さらにはご遺族の皆様に対し、重ねて心から哀悼の意を表します。大遠忌法要のスローガンは、「世のなか安穏なれ」との親鸞聖人のお示しを掲げております。この宗祖のお心を体し、被災されたすべての方々の悲しみに寄り添い、その思いをわかちあって大遠忌法要をお勤めさせていただきたいと願っております。

■親鸞聖人750回大遠忌法要 ～親鸞聖人に出会う～



2011年4月8日、阿弥陀堂にて「東日本大震災追悼法要」、引き続き御影堂にて「親鸞聖人750回大遠忌法要開始式」が行われました。4月9日から16日まで修行された親鸞聖人750回大遠忌法要の第一期。各期間の9日から12日までは「宗祖讃仰作法(第一種)」によるお勤めです。

13日から16日までは「宗祖讃仰作法(第三種)」音楽法要によるお勤めとなりました。法要が始まると演奏者と讃歌衆、そして参拝者に緊張感が。荘厳な旋律で音楽法要がはじまり、皆さん一生懸命にお勤めをされていました。



☆ 初参式5月16日(月)朝席

初参式とは、子どもが生まれたことを喜び、お寺に初めてお参りして受ける式です。平成22年に生まれた子どもをいっしょに集ってもらい初参式をし、みんなに紹介して、お祝いします。5月の親鸞聖人の御誕生日の法座で午前10時より、当山隨泉寺の本堂、阿弥陀さまの尊前で、厳粛におこなわれます。

家族の皆さんと一緒に、お寺にお参りして、尊い仏縁にあうことは素晴らしいことです。初参式という仏縁にあって、それぞれのご家庭の中で、仏様の教えが中心となるような環境を作って頂き、子どもたちが仏の子として健やかに成長されますことを念じるものです。

「生まれてきてよかった。」といえる人生になってもらいたいと思います。

☆門信徒会総会5月16日(月)朝席終了後～

門信徒会の総会を開催します。今年は京都の本願寺に親鸞聖人750回大遠忌にお参りしますので、一日だけの法座になりますが、誘い合わせてお参りください。今年度の行事予定や予算を審議してもらいます。

5月

すばらしい自然のいとなみ その中で 生きていることの ただごとのなさ

私は、日本一の貧乏寺に生まれました。それはそれはひどい貧しさで、食べるものなんかも、今の時代からみると、想像もつかないものでした。秋から冬にかけては「ちょぼいちごはん」という、大根を米粒ぐらいの大きさに切って米のとき汁でたき、少の米に塩をふりかけていたもので、見たところは白いごはんなのですが、大部分は大根です。夜、炊いたときには、ムッとへんなにおいがして、なかなかのどを越しませんし、朝になると、それが氷って、ガリガリ、音をたてる、といったものでした。その上、親の借金のうけはんの責任をつかれて、家財道具のさしおさえの 知をもらったのが、小学五年生のときでした。

貧乏の上に病人のたえ間がなく、八歳で母が死んだのをはじめに、二十八歳で父が亡くなりますまでの二十年間に、六つの葬式をだすという有様でした。

でも、そういうことが、けっきょく、私の人生のきびしさを教えてくれることになり、「よし、やるぞ!」という土性骨を育ててくれたことを思うと、すべてに恵まれている今の子どもたちよりも、私の方がしあわせであったという気がします。

その上、おもちゃも、ラジオも、テレビも、そういうものを全然もたない私でしたが、私には、豊かな、美しい、そして限りなく広大な、自然がありました。

あれは五年生ぐらいのときだったのでしょうか。学校の帰り、空の天じょうについて友だちと議論しながら帰ったことが、今もはつきり思い出せます。秋だったのででしょうか、とても空が澄んでいました。それを見あげながら、

「空のてんじょうは、どこにあるんだろうか？」

「天じょうなんてあるかい、どこまでいっても、どこまでいっても空なんだ」

「でも、その空を、ぐんぐんのぼっていったら、きっと、もうこれ以上の上はないという空のてんじょうがある気がするんだ」

「そんな、てんじょうなんてないのが空なんだ。いってもいっても空なんだ」



「そこを、もっともっと行くんだ。そしたら、もうこれ以上はないという空のてんじょうが、きっとある気がするよ」

「いや、そんなものはない、いってもいっても空なんだ」

「それを、もっともっと行ったら、きっと空の空のてんじょうが……」

「それがないんだ、それが『無限』っていうことなんだ」

「おかしいな」

「ふしぎだなあ……」

二人で立ちどまって仰いだ空の青さが私には、今も鮮やかに思い出せます。

今の子どもたちは、どうもアメリカ文明というか、東京文明というか、地上の文明に目をくらまされて、私たちを育ててくれたあのすばらしい自然を見失っているのではないのでしょうか。

こんな思い出もあります。朝顔の一度咲いてしまった花びらを、キリリとねじって、にせものつぼみをつくった思い出です。ちょっと見ても、にせものだとわかるのもありましたが、中には、ほんとうのつぼみのように見えるのもできました。それが、ひとつくらい、ほんもののつぼみとまちがえて、もういっぺん咲くかもしれないと、考えると、あくる朝が、楽しみでしようがありませんでした。

あくる朝、夜が明けるか明けないかというときに、とびだして、にせのつぼみが、ほんものとまちがえて、もう一度咲いていないかと、見にいったものです。ところが、ひとつのまちがいもなく、ごまかしもなく、にせのつぼみは、そのあわれなしおれた姿を、下におとしているか、かろうじて、ガクにくつつけているか、という有様です。

「花は、やっぱり、知っているんだ!」

「花は、やっぱり、知っているんだ!」

そんなことをつぶやきながら、朝顔のそばで、考えこんでしまった私でした。

私は、このようにして、すばらしい自然のいとなみ、その中で、生きているということが、どんなにすばらしいことなのか、ということ「自然」によって教えられてきましたし、生きているということの、ただごとのなさを知らされてきました。

だれにだったあるんだよ ひとにいえないくるしみが
だれにだってあるんだよ ひとにいえないかなしみが
ただ だまっているだけなんだよ いえばぐちになるから
あなたにめぐりあえて ほんとうによかった
ひとりでもいい そういつてくれる ひとがあれば

あいだみつお